

小学6年

国語

物語の表現の効果を考える

書き表し方で伝わり方が変わる

自分で考えて書きましょう。わからないときは、QRコードで動画の場面を見よう。

- ① 手紙を読んで悲しむ場面です。情景で気持ちを伝えている文は、「わたしは悲しかった。」「灰色の雲が空をおおっていた。」「わたしは手紙を読んだ。」のどれですか。



動画で見る
場面 2
「情景と気持ち」

- ② 「走った。息が切れる。あと少し。」を「走った。息が切れる、あと少し。」とくらべましょう。変えたのは、後ろの二つの文の間の句点を読点にしたことだけです。短い文が続く書き方の効果を説明しましょう。



動画で見る
場面 4
「短い文の効果」

- ③ 「雨がふっていた。」と「雨が窓をたたいていた。」では、伝わり方はどうちがいますか。



動画で見る
場面 1
「書き表し方をくらべる」

物語の表現の効果を考える

書き表し方で伝わり方が変わる

- 1 手紙を読んで悲しむ場面です。情景で気持ちを伝えている文は、「わたしは悲しかった。」「灰色の雲が空をおおっていた。」「わたしは手紙を読んだ。」のどれですか。

ヒント 天気や景色の様子が書かれている文をさがそう。

答え 「灰色の雲が空をおおっていた。」です。空の様子(情景)をえがくことで、人物の暗くしずんだ気持ちが伝わってくると感じられます。「わたしは悲しかった。」は気持ちをそのまま書いた文、「わたしは手紙を読んだ。」はしたことを書いた文です。

- 2 「走った。息が切れる。あと少し。」を「走った。息が切れる、あと少し。」とくらべましょう。変えたのは、後ろの二つの文の間の句点を読点にしたことだけです。短い文が続く書き方の効果を説明しましょう。

ヒント 二つを声に出して読みくらべてみよう。

答え (例)この例では、短い文が続くことで、走っている人の息づかいやきんちょうが伝わってくると感じられます。文をつなぐと、息をつぐ間がへって、少し落ち着いた感じになると感じる人もいます。短い文がいつも同じ効果をもつわけではなく、内容や前後の文によって変わります。感じ方は人によってちがってかまいません。どの表現からそう感じたかをいっしょに言えていればよいです。

- 3 「雨がふっていた。」と「雨が窓をたたいていた。」では、伝わり方はどうちがいますか。

ヒント 「ふって」と「たたいて」のちがいに目を向けよう。

答え (例)同じ雨でも、「雨が窓をたたいていた。」の方は、雨つぶが窓に当たる所に目が向き、音まで聞こえてくるように感じられます。「たたいて」という言葉から、雨つぶが窓に当たる様子を想像できるからです。感じ方は人によってちがってかまいません。